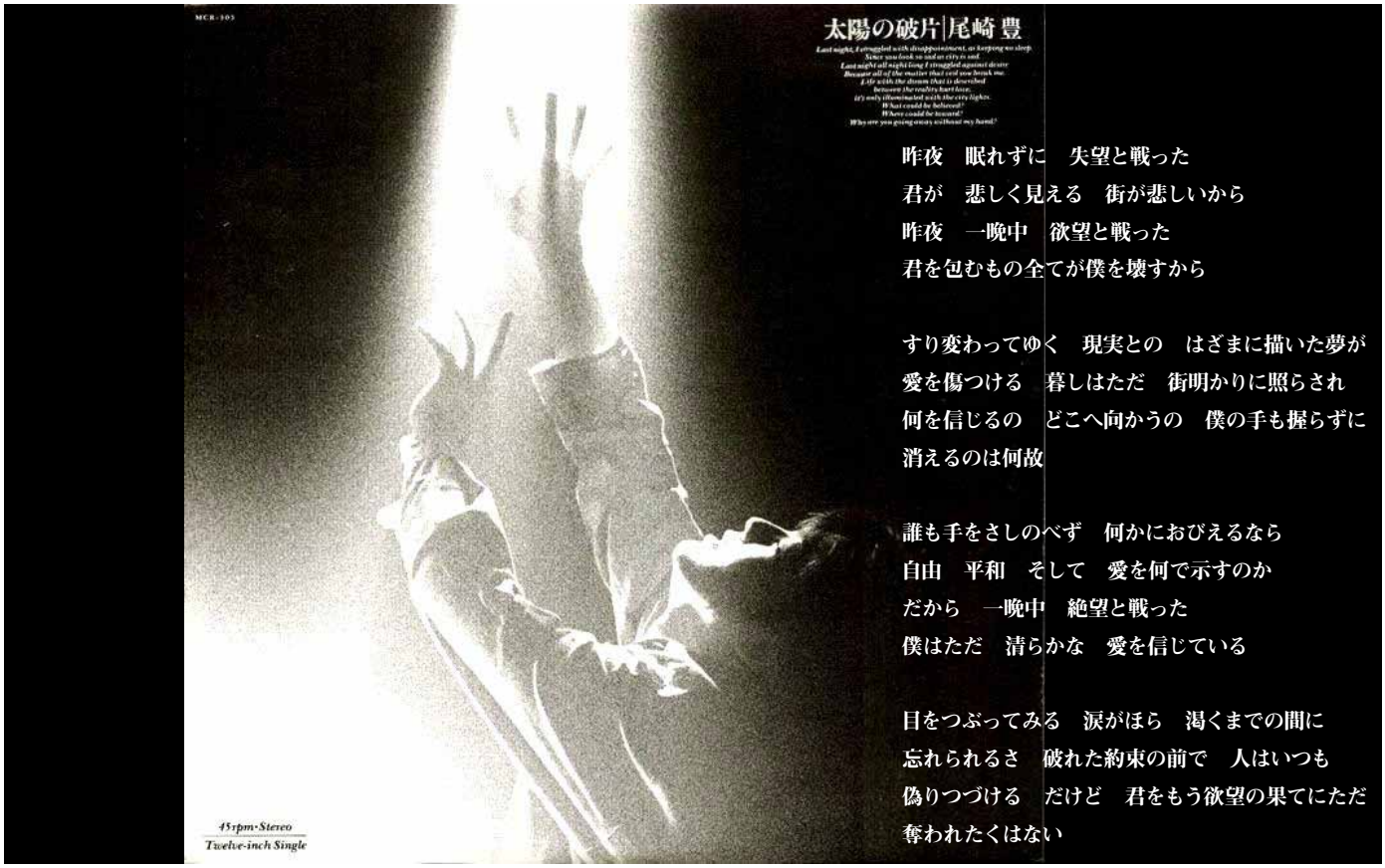
白州だより

白州郷牧場からの初夏のおたよりをお届けします！ http://www.hakusyu.jp/　info@hakusyu.jp

2011 年 6 月 6 日
二十四節気　芒種

発　行　　白州郷牧場
山梨県北社市白州町横手 2259
TEL : 0551-35-4520
FAX : 0551-35-2970



昨夜　眠れずに　失望と戦った
君が　悲しく見える　街が悲しいから
昨夜　一晩中　欲望と戦った
君を包むもの全てが僕を壊すから

すり変わってゆく　現実との　はざまに描いた夢が
愛を傷つける　暮しはただ　街明かりに照らされ
何を信じるの　どこへ向かうの　僕の手も握らずに
消えるのは何故

誰も手をさしのべず　何かにおびえるなら
自由　平和　そして　愛を何で示すのか
だから　一晩中　絶望と戦った
僕はただ　清らかな　愛を信じている

目をつぶってみる　涙がほら　渇くまでの間に
忘れられるさ　破れた約束の前で　人はいつも
偽りつづける　だけど　君をもう欲望の果てにただ
奪われたくはない

「お蔭参り」か

椎名盛男

今の太陽は 3 代目だという。太陽が爆発し、宇宙に飛び散った。それが再度、集積し、太陽ができた。飛び散った太陽の破片、それが全部、太陽に集まって、火の鳥のように再生したわけではない。表紙の尾崎豊の「太陽の破片」は 1988 年のものである。私にはチェルノブイリの歌のように聞こえた。破片は地球の創造にも取り込まれた。それがウランである。だからウラン 238 は 45 億年くらいたたないと消えない。この年月は、太陽の寿命と同じだ。むろん地球も。クロマニヨンが 45 億年も生存していることなど 100%ないだろうが、銀河は 1000 個みつかっており、太陽はすでに 26 個みつかっているそうだ。アメリカの大馬鹿野郎どもは、違う銀河に行き、地球を使い捨てのスリッパにして、違う銀河でドル紙幣が一般的等価物として使えると思っているのだろうか。

世界も生態系もあの日変わった

チェルノブイリ。あの日から生態系の外から来た放射性物質に地球の生態系はすべて汚染された。私自身を含めて、あまりにも無自覚であった。1986 年のチェルノブイリの事故の日をもって、西欧の一神教は終わったのだ。チェルノブイリは、広島原爆の 2600 倍の放射性物質を炉心に抱えていたという。また、冷戦の原発合戦は、1980 年代までで 423 回に及ぶという。天空の汚染は、冷戦下のレベルに戻った、という。チェルノブイリ以来、すべての食べ物飲み物は汚染され、とりわけヨーロッパはひどい。そのひどさに加え、汚染された食べ物は、白人の権力機構で最貧国へ押しつけられている。福島第一原発は、もうチェルノブイリを超えたのかもしれない。スイッチひとつ入れれば、原発推進派になる。私は、放射能測定器を持ち、食べるべきと思う。

廃県置州

福島県民と為政者は、これだけの惨事を引き起こしたことに責任を感じているのか。避難所で被災者顔している場合ではないだろう。誘致した首長とその一族、推進派の一族は雲隠れしたのだろうか。世が世なら、三族腰斬の刑で、東電、経産省、官邸の前に死体をさらすべきではないか。

福島県は責任をとれまい。だったら、県をやめますと政府に地方行政を返上すべきだ。あるいは、原発好きの石原の東京都と合併すべきだろう。加えていえば、政府丸ごと、原発村の諸君を連れて、福島第一に首都を移転すればいい。

子供たちの未来のためというイデオロギーを私は信じない

反原発、脱原発が「自衛」という核家族の私利にとどまるのなら、国民的大衆運動とはなるまい。反原発という二項対立は弁証法の対象ではあるまい。原発の事故の惨事をいくら訴えても「なに、その時には俺たちは死んでいる。金はもらった方が得」という、浅ましい村政治が、日本人の精神の基底に流れている。こういう精神を、寝床で培養しているのは妻たちである。御用学者の妻も同じだろう。

被災者たちをみていて思う。「別れがあるのなら人はなぜ出会うのだろう」と。

万全と言った御用学者が科学の名で行ったことは、紙オムツ、古新聞、オガ屑を投げ入れるというものだった。唖然としたのは私だけではないだろう。彼らがやったことは、喜劇であったが、惨劇は今日も明日も続いていく。私は、飯田哲也さんや、小出裕章さんの言っている方向で良いと思う。おそれおおくも核融合などという太陽をつくった。

そろそろ、天からお札が降ってくるだろう。お蔭参りの時期かもしれない。

フィリピン・ネグロス島、カネシゲファーム訪問　～報告と感想②～

４月10日

急きょ電車で成田まで行くことになり、若杉、竹内、阿部の３人で出発。夜中の１時ごろ成田着。ホテルへのタクシーで運転手さんに、地震、原発事故の影響で空港は混んでいますかと聞いたら、外国人の出国はほぼ終了し、ガラガラとのこと。

ホテルにチェックイン。３人で 9500 円、安い。

４月11日

７時過ぎに空港着。秋山校長と合流。英語ができず旅慣れない３人、秋山さんが一緒で心強い。

飛行機は順調に飛び、夜ネグロス空港へ着、大橋成子さん，アンボさん夫妻の出迎えを受ける。夕食までの道すがらネグロス島の経済状態を聞いた。最近は大きな資本が投下されてショッピングモールなどができたり、物品もお金も多く回るようになったが、貧富の差が大きくなり、物価も上がって貧困層は苦しい生活を強いられている。ちなみに物価は米１ｋｇ３５ペソ、軽油１Ｌ５２ペソ、ガソリン１Ｌ６２ペソ、レートが１ペソ＝２円。物価は日本の５分の１くらいなので燃料はかなり高い。日本と同じく原油はほぼ輸入で、リビアの問題で急騰しているそうだ。

原発のせいで日本では魚が食えなくなるので、夕食は魚料理をいただいた。ココナツミルク味、照り焼き風、カルパッチョととてもおいしい。

食べながらの話はどうしても原発の話になる。

４月12日

朝起きて外を見たら、プールで竹さんが泳いでいた。

今日はカネシゲファームを訪問する。

ネグロス島は、もともとネグリストという狩猟民族が先住していたが、隣のパナイ島からの移住者が住み着き、その後スペインの植民地となった。

大地主との農地解放闘争時代の話は耳を覆いたくな

るが、とくに、せっかく農地を獲得したのに、多くの農民が使いこなせずに結局大地主に二束三文で売り払い、元のサトウキビ労働者へ戻ってしまったことが、農業の歴史をサトウキビによって断ち切られてしまったこの島の現実を物語っている。

途中、スイカとマンゴーを買っていく。隣のパナイ島で生産しているそうだ。マンゴーは青いうちに収穫し、店で追熟させるそうだ。

昼、カネシゲファーム着。農場内を案内してもらう。

豚を中心とした有畜複合経営で、母豚２３頭、地豚の母豚２頭、種豚１頭。45 日令の子豚を売って現金を得ている。1 頭 2250 ペソ位で売れるそうだ。

飲水は、ＢＭＷによる飲水改善が行われていて、豚舎の洗浄は生物活性水槽からくみ上げて使用している。豚舎内はきれいで臭いも少なく、何より豚が落ち着いていて、良い状態で飼育されていることが一目でわかる。

現在、育成豚舎を建設中で、完成すれば 120 頭の豚を 150 ～ 180 日令まで肥育する予定だ。そうすれば 6000 ペソほどで売れるそうだ。

豚舎の洗浄水は、糞尿とともにメタン発酵槽へ行き、そこから出たスラッジは畑へ散布、上澄み液は生物活性水槽へ行く。また豚舎の洗浄水へと循環している。メタンガスはファームの煮炊きに使用されている。

生物活性水槽へは沢の水が、飲水槽へは湧水がポンプアップされていて、このポンプが高低差の水圧を利用したラムポンプという無動力ポンプで、１mの高低差で２０mの揚力があるらしい。

湧水がわく水源の前に故兼重さんの墓があり、皆であいさつをした。

夕方、炭を焼くところを見学させてもらった。炭焼き小屋などなく、露天で焼くようだ。原料はマドレカカオという木で、火持ちがいいそうだ。土を少し掘り下げ、原料を置く台になる木を置いてその上に原料を積み重ねる。回りをバナナの幹で囲んで、上に草をかぶせ、さらに土をかぶせる。台木の間から火を付け、台木が燃え尽きると全体が下にさがり密閉されて蒸し焼きになる構造のようだ。翌日の昼ごろ焼きあがるそうだ。

夜、ハリーナの取材で、カネシゲファームのスタッフ、研修生たちが、日本で起こった地震、津波、原発事故についてどう思うかディスカッションした。フィリピンは地震国であり、スマトラ大津波があってまだ間もないので、今回の震災についてはみな知っていた。また、今回の津波は映像が多く、ニュースなどを見て衝撃をうけ、日本の知っている人たちがどうなったのかとても不安になったとのこと。

原発については、発電所が壊れて毒が撒かれた、くらいの知識だった。日本人の私でさえ放射能、放射性物質、放射線の区別を今回知ったくらいだから無理もない。もし行き場のない人がファームに来たら喜んで受け入れると頼もしい言葉をいただいた。

もし、フィリピンに原発ができたらどうするか、との問いには、今まで電気なんか無い生活をしてきたし、現在も不便は無いので原発は必要ないとのこと。

フィリピンでは、マルコス政権時代に原発建設を行ったが、工事が終了してしまうと仕事が無くなってしまうので、労働者たちがつくっては壊し、つくっては壊しを繰り返したため工事は一向に進まず、アキノ政権に代わって中止になったことがある。権力者にとって一番いやな、たくましい人たちである。

４月１３日

朝から豚舎の清掃、えさやりを体験。ちょうど母豚が発情していたので種付けを見学することができた。

研修生たちは自分の豚を持っていて、育てて売ったときに餌代を引いた金額が自分の収入になるそうだ。

カラバオの耕うんを体験させてもらった。竹さんと阿部ちゃんが体験したが、カラバオは頭がよい。だいたいどの辺を歩けばよいのか分かっているようで、きれいに天地返しされていく。ただ、土を細かくすることができないので、大橋さんは耕運機がほしいといっていたが、秋山さんは、研修生が家に戻った時に耕運機のない農業をするのだから、研修にならないとのこと。納得。

野菜は、チンゲンサイ、にがうり、ナス、いんげんの輪作で、にがうり、いんげんは３カ月、ナスは１年間収穫できるそうだ。ちなみに米は１年で 2.5 回作付でき

るそうだ。

その後、子豚の去勢を体験した。実際にやっているところを見せてもらい、竹さんと阿部ちゃんが行ったが、これは痛い。3人とも内またで豚舎を後にした。そして、豚餌の発酵を教えてほしいとの事だったので、豚餌に生物活性水で水分調整し、どの程度の水分にしたらよいか感触で教えた。

新豚舎が落ち着いたら、地鶏の育成を始める構想で、予定地を見せてもらった。５０坪くらいで、生んだ卵をそのまま親鳥に抱かせて孵し、育成して肉用鶏として売るらしい。何羽入れられるか聞かれたが、採卵鶏ならわかるが、そういう飼い方は調べないとわからない。今は金網で囲った中に、地鶏や七面鳥、あいがも、アヒルなど一緒に飼っているので、勝手に交配してわけのわからない鶏が生まれるそうだ。

炭は、まだ焼きあがっていなかったので見ることはできなかった。後で写真をメールしてくれるそうだ。ちなみに炭の価格は５０ｋｇ米袋に詰めて１５０ペソ。

午後、カネシゲファームを後にし、バコロドのホテルにむかう。途中の道は広大なさとうきびの畑が広がっていて、そろそろ時期が終わるとのこと。サトウキビは、先端の生長点を切り取り、畑に植えると根が出てきて成長する。花をつけると糖分がうしなわれるので種がつく前に刈り取る。連作障害もないそうだ。途中、製糖工場の前を通ったが、ハウルの何とかの城のような巨大な要塞のようだった。また、大地主の果樹畑の前を通ったが、ケタが違う。ネグロス島に１０００ｈａの農地が１１あり、国内の大手企業のほとんどの大株主、政界にも食い込んでいてその資産はすさまじい。こんなところから闘争の末に農地をもぎ取った農民たちはすごい。

今旬だからと、露店でシンカマスという野菜を食べた。見た目は巨大なにんにくのようで、スライスしてフィリピンのしょうゆ、塩、酢をかけた食べるのだが、味、食感はヤーコンをスライスしたのによく似ている。阿部ちゃんはすごい勢いで食べていた。

夕食を食べた店でトイレに行ったが、男便所のあさがおの位置が異常に高い。手で持ち上げないと付いてしまう。植民地時代のなごりらしいが、現地の人たちはどうしているのか不思議だ。

４月１４日

ＡＩＤ財団見学。オランダ人のオオキ氏がつくった財団で、自然エネルギーを利用したシステムの販売、展示をしている。

１、水力発電

廃自動車の発電機を利用した水力発電で、水力でタービンを回す、単純だがお金をかけなくても発電できるシステム。100 wと 300 wがあった。

２、ラムポンプ

水圧を利用した無動力ポンプで、高低差１ｍ、１５L毎分以上あれば最低２０ｍあげることができる。

３、バイオガス豚舎

豚舎から出るスラリー状の糞尿、洗い水を密閉槽にためてメタン発酵させ、ガスを火力利用する。

４、ハーブオイル抽出器

ハーブと水を入れて火にかけ、蒸気を集めてオイルと水に分離する機械。財団の店でレモングラスのオイルを売っていた。

５、井戸

日本では見られなくなった手動式の井戸や足踏み式の井戸があった。

工場も見せてもらった。ラムポンプは構造はシンプルで、管理はごみつまりの点検とパッキンの交換だけでよく、古タイヤを切ったものでよいそうだ。ただ、入水口径と出水口径、水圧をかける筒の長さや太さに計算式があるようだがそこまでは聞けなかった。

午後は、まず竹さんが行きたいと言っていたＳＭストアで買い物。フィリピン資本で、靴屋から一代で国内に巨大モールを何十も構える企業に成長したらしい。その後、カンラオン山の中腹にある温泉に入った。手軽なリゾート地のようになっていて、ちょうど休暇の時期もあってテントでキャンプしている子供がたくさんいた。ちょうどよい熱さだったが、フィリピンの人たちにとってはかなり熱いらしく、源泉付近を独り占めできた。見上げるとコウモリが大量に止まっていて、気をつけないと糞が落ちてくる。

夜、ＣＮＮやＢＢＣを見ていたが、原発の報道はほと

んどなく、リビア問題ばかりだった。距離の問題もあるが、リビアを攻撃しているイギリス、フランス、アメリカは原発や原油の巨大企業や日本の原子力廃棄物の再処理を請け負っている。報道したくないのはわかるが、執拗なリビアへの攻撃はそのためではないかと思いたくないが。

4月15日

そそくさと朝食を済ませ空港へ。アンボさん、大橋成子さん夫妻と再開を誓いマニラへ。飛行機が遅れたが無事災害と原発の国へ帰還。白州へ着いたのは夜中の2時を過ぎていた。

カネシゲ農場は、立て直しに入って1年くらいとのことだが、素晴らしいものだった。なんとなく昔の白州の臭いを感じた。豚の肌つやや、落ち着き方を見れば、ストレスのない、丁寧な飼い方をしているのがよくわかる。アンボさん成子さんの努力と、スタッフや研修生の意欲も高く、ネグロスの農業を変えていく拠点として、さらに発展していくと思う。

貧富の差が大きくなり、生活は大変だろうが、物量や利便性と引き換えに大切なものを失った日本の二の舞だけはしてほしくないと思う。

現地での案内や手配をしていただいたアンボさん大橋成子さん夫妻、旅慣れない面々を引率してくださった秋山校長、そして今回の機会を与えた下さった椎名社長やスタッフの方々に、心より御礼申し上げます。

フィリピンはネグロス島に研修旅行に行ってきました。

ネグロスに着いたときの印象は、思ったよりも人が多く、バコロド市内は大型スーパーや、ショッピングモール、外食チェーンの店なども結構あり、ジープニーやトライシクルなど日本ではお目にかかれない乗り物も走っていて活気にあふれていて、思ったよりも都会という印象だった。

しかし、一歩裏通りに目を向けると今にも潰れそうなプレハブ小屋のような家が何件も軒を連ね、そこで生活している人が沢山いるのを目の当たりにすると、自分が知っているフィリピンのイメージってこんな感じかなとも正直思った。

フィリピンはいまだに農地解放が進んでいないと聞きます。地主とサトウキビ畑などで働く労働者との間に凄い貧富の差があると。そんな中で今回の研修の目的の一つであるカネシゲファームは自分たちで農地を開拓し農業をしている数少ない農場と言えるのではないだろうか。

カネシゲファームではいろいろな事を経験させてもらった。豚の世話、子豚の去勢、カラバウでの耕うん、炭づくりの見学などなど。どれも貴重で刺激的な経験だった。

それと今回カネシゲファームのスタッフ及び研修生と我々白州のスタッフで『地震・津波・原発』について話しをしました。地震、津波についてはフィリピンでも頻繁に映像が流れるらしく、悲惨な現状を理解している感じでした。しかし、原発の話になるとよく解らない様で放射性物質を『毒』という表現で表していました。もっとも僕自身も放射性物質がどういう物か、どれだけ受ければどのように体に影響するのかなんて具体的には解らないから、むこうの研修生が解らないのも無理はないと思う。彼らに「原発があれば電気がいつでも使えるし、電気代だって安くなるかもよ」と問いかけたら、「原発は毒を出すものだから必要ない。そんなものを造るぐらいなら電気なんてなくてもいい」という答えが返ってきた。確かに彼らの生活を見ていると最低限の電気さえあればそれ以上は必要ないように感じる。自然の力をうまく活用できれば原発なんかに頼らなくても生きていける。彼らを見ているとそう思えてくる。揚水ポンプやバイオガスプラントなんかもその一つではないだろうか。もしかしたら本当に人間らしい生き方とはこういう事なのかもしれない。僕らも見習うべきところがあるのではないだろうか。

カネシゲファームでの一日は非常に充実したものでした。これからもっと交流を深めていき、いつかはカネシゲファームからも白州に研修に来てもらいたい。そういう日が来る事を願っています。

4月11日に成田空港を出発しました。はじめての飛行機と海外で少し緊張しました。フィリピンがどんな国かあまり知らず不安もありましたが、それ以上に期待感があり色々と見てまわりたいと思いました。夕方にバコロド空港に着き、そこでアンボさんと成子さんが出迎えてくれました。ネグロスは思ったほど暑くなく夜は肌寒いくらいでした。

4月12日、朝8時30分にホテルを出発して、カネシゲファームに向かいました。フィリピンの交通は車・バイク・自転車などが激しく混雑していて日本と違いビックリしました。お昼前にはカネシゲファームにつき、まずは農場見学をしました。農場は思ったより広く作物が育っている所、耕し始めた所がありました。耕し始めた所はまだ土が固く、これからいい土にするのは大変だなと思いました。豚舎に見学に行くとブタが思っていたより大きくて驚きました。BMプラントは大きくて第一槽で出たガスを利用し生活に使えるようになっているのですごいなと思いました。見学が終わると、昼食になりカネシゲファームの人たちとごはんを食べました。午後はスミ作りなどをして過ごしました。夜ではカネシゲファームの人たちと原発の事について話し合いました。

翌日、4月13日ではまず豚舎の掃除をやっているとブタの発情がきてブタの交尾を見ました。涼しいうちにカラバオを引いて畑を耕しました。カラバオはとても操作がむずかしくとても重労働でした。これを毎日のようにやっているときいてすごいなと思いました。でもカラバオを引いてたときはとても楽しかったです。次はブタの去勢をしました。ブタの去勢ではカミソリを使っていてビックリしました。中々痛々しく緊張しましたがなんとか無事にできて良かったです。お昼ご飯を食べたあとカネシゲファームの人たちとお別れをしました。夕方には魚市場に行き、そこでは人がいっぱいで賑わっていました。夕食は魚料理のお店でした。とても美味しかったです。

4月14日、最後の日はAIDFI・Hydraulicに見学しに行きました。

最後に、フィリピンでは発酵文化があまりなく、発酵食品といえば塩漬けが主流らしく、発酵食品のバリエーションがないと聞き、フィリピンの食材、気温、湿度でも作れる発酵食品を考えてみたいです。

「安全な水」をお届けします

東日本大震災と福島原発事故の影響で、現在、安全な水が入手困難という報に接しています。幸いに白州郷牧場グループでは二本のボーリング井戸（深さ60m）を持っています。わたしたち白州郷牧場は、水の支援を決定しました。

・山梨県北杜市「おっぽに亭こっこ」に汲みに来られる場合

ペットボトル等をお持ちください。

・郵送の場合

容器代と送料、代引き手数料はご負担ください。

例.（東京地域の場合）450円＋500円＋315円　＝1265円

・郵送の注文の仕方

FAX（0551-35-0132）もしくは、

メール（info@hakusyu.jp）にて、

1. お名前　2. 住所　3. 電話番号

を記入して申し込んでください。配送日と時間の指定はできません。

水量は、1回の申し込みで20リットル容器1箱とさせていただきます。